

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

おさかべ姫
姫路城 天守閣の主



伝説

おさかべ姫
姫路城 天守閣の主

紀行

姫山の地主神
・天守閣の主
・姫山の地主神
・刑部神と富姫神
・『播磨国風土記』の姫山伝説

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

おさかべ姫 姫路城 天守閣の主

江戸時代の姫路城。今夜も殿様（とのさま）のおそばに仕える若い小姓（こしょう）たちが、交代で寝ずの番の仕事についていました。秋の夜長、ひとしきりうわさ話に花を咲かせた後、いつものように話題は天守閣（てんしゅかく）に住むという主（ぬし）の話になっていきました。

五層七階建ての天守閣、その最上階に、おさかべ姫という主がいて、年に一度だけ殿様が一人きりで対面するのだ、と子供のころからみな聞かされていたのです。

「いつも同じ話ばかりしていてもつまらんな。どれ、どんなやつなのか、おれが見てきてやろうじゃないか。」

まだ十七、八歳で生意気盛りの小姓たち。その中でもひととき元気のよい森田図書（もりたずしょ）は立ち上がると、ちょうちんを手に持ってなんでもないようにスタスタと天守閣へと向かっていきました。

夜の天守閣、真っ暗やみの中、小さなちょうちんの明かりだけを頼りに、急な階段をそろそろと一階、また一階と登っていきます。気の強い図書ですがやはり人の子、心の中ではいろいろな想像がぐるぐるとうずを巻いていました。

「主というからには、老婆（ろうば）の姿をしているのだろうか。あるいは、狐（きつね）の化身（けしん）という話も聞いたことがある。」

「会ったらどうなるのだろう。やはりとり殺そうとおそいかかってくるだろう。」

「やはり引き返そうか。いや、いまさらそんなことはできない。」

ついに最上階にたどりつきました。

「やはり、いる。」

だれもないはずの最上階、でも、戸のすき間からぼんやりと明かりがもれていました。図書は一息深呼吸をしてから、静かにその戸を開けました。

「だれじゃ。」

一言、きびしい声がひびきわたりました。図書は思わず、「ははーっ。」と平伏（へいふく）しました。声の主が図書の方を振りかえる気配がしました。やがて図書の方へ向き直る着物の音がします。はりつめていた空気が少しやわらいだような気がしました。

伝説

おさかべ姫 姫路城 天守閣の主

「そこにいるのは何者か。」

今度はやわらかい声でした。まだあどけなさの残る顔立ちで、刀もさしていない図書を見て、安心したような声です。図書も少しほっとして、

「お城の小姓、森田図書と申します。」

と、ここまで登ってきたわけを正直に話しました。平伏（へいふく）しながらそっと相手の姿を見ると、年のころは三十代半ばか、色白で高い鼻筋の美しい女性が十二単（じゅうにひとえ）を着て座っていました。

「そうか。それは勇気のあることじゃ。ならばここまで来た証拠に、これを持ち帰るがよい。」

図書の前に兜（かぶと）のシコロ（首まわりの部分）が置かれていました。図書はシコロをありがたくいただき、一礼して部屋を出ていきました。

翌日、殿様のもとへもこの話が伝わり、図書は、持ち帰った兜のシコロを差し出しました。それを見た殿様の顔が青ざめました。

「すぐに家宝の兜を調べよ。」

城主の命で、蔵の中の兜を取り出してみると、シコロが引きちぎられていました。図書が持っていたものと合わせるとぴったりとはまります。城主が会うときはいつも、天守閣の主は老婆の姿なので、図書の話を少しうたがっていた城主も、これを見て納得した、ということです。

（『兵庫の伝説』第二集をもとに作成）

紀行 姫山の地主神

天守閣の主

姫路城天守閣には主がいるという。その名は「おさかべ姫」。あるいは単に「オサカベ」とも呼ぶ。このサイトで紹介している『播州皿屋敷』でも、姫路城を手に入れた青山鉄山（あおやまてつざん）を悩ます怪異として登場する。



おさかべ姫と宮本武蔵
(錦絵 東錦昼夜競、個人蔵)



姫路城



姫路城

この話は、延宝5（1677）年に出版された『諸国百物語（しょこくひやくものがたり）』や、安永8（1779）年の鳥山石燕（とりやませきえん）『今昔画図続百鬼（こんじゃくがずぞくひゃっき）』などにも載せられ、江戸時代の前半からすでに全国区の伝説だった。

現在、年間100万人近くの人々が訪れる姫路城。昼間は人がとぎれることは少ない。しかし、そうした現代でも、天守閣の中に入ると、窓から差し込む日の光だけが頼りの薄暗いところも多い。電灯のない江戸時代の夜中のことを想像すれば、その暗闇の深さははかりしれない。

天守閣で小姓が「おさかべ姫」に会った、という伝説からは、やがて宮本武蔵が天守閣の妖怪退治に向いておさかべ姫と対面したとする講談なども登場した。近代の文学作品としても、天守閣の主である富姫（とみひめ）と、若い鷹匠（たかしょう）である姫川図書之助（ひめかわずしよのすけ）との恋を描いた、泉鏡花（いずみきょうか）の『天守物語』などがある。

さて、延宝5（1677）年出版の『諸国百物語』では、「秀勝（ひでかつ）」という城主が若侍に命じておさかべ姫に会いに行かせた、という話になっている。しかし、同書を引用したと明記している別の書物、たとえば宝暦3（1753）年の『播陽因果物語（ばんよういんがものがたり）』などでは、城主の名は現在の姫路城を建設した池田輝政（いけだてるまさ）になっている。ここから、『諸国百物語』の版によっては、城主は輝政と記されていたものもあったと考えられている。

また、『諸国百物語』にはこれとは別に、輝政が病に倒れたとき、城内で高僧が祈祷（きとう）をしていると、30歳ほどの女性が薄化粧をして現れ、祈祷をやめると声をかけた、という話も載せられている。

輝政の病をめぐる怪異に関しては他にも史料がある。小野市歓喜院（おのしかんぎいん）と多可町円満寺（たかちょうえんまんじ）には、「播磨のあるじ」を名乗る天狗が輝政にあてた書状と言われるものや、それにまつわる記録類が残されているのである。この書状は城内に寺院を建てよと輝政に要請するもので、慶長14（1609）年12月と、現在の天守閣が完成したばかりのころの年代がついている。この書状は、いったん城内で発見され、直ちに輝政にも見せられたが、その時は黙殺された、という。

しかし、その2年後、輝政が病に倒れた。池田家では、円満寺の明覚（みょうかく）を招いて祈祷を行わせたが、その最中に、先の天狗の書状があらためて藩士から提出された。明覚は、この書状が要求するとおりに寺院を建立することを勧めたので、池田家では、鬼門（きもん）にあたる城内北東部に、「八天堂（はってんどう）」という仏堂を建てた、とされている。

さらにこのころ、輝政の病は、城が建っている姫山（ひめやま）の地主神（じぬしがみ）である長壁神（おさかべがみ）のたたきだ、との噂も流れていたという。長壁神は、もともとは姫山の上まつられていたが、羽柴秀吉（はしばひでよし）の姫路築城にともなって、城下の播磨総社（そうしゃ）に移されていた。そこで池田家では、長壁神社をも城内にまつり直した、とされている。

ここで述べた事件の経緯は、どこまでが事実で、どこからが虚構なのか、ややはっきりしない。この経緯には、明覚の功績を強調するための脚色が含まれている可能性が多分にある。

ただ、輝政の病を契機に、八天堂が建立され、長壁神社が再び姫山にまつられるようになったことは確かなようだ。また、こうした話が生み出され、語られ続けてきた背景には、新しく領主となった池田家に対する、当時の播磨の人々の違和感があったことも指摘されている。円満寺の明覚は、こうした地域の「世論」とでもいうべきものを読みとっていたのではないだろうか。彼が八天堂の建立を勧めたのは、池田家に寺院の建立をさせ、地域の宗教勢力への配慮を示させることで、地域の「世論」との融和をはからせようとの意図があったと考えられるのである。

姫路城天守閣に「おさかべ姫」という妖怪が棲んでいる、との伝説の源流は、この事件にあると指摘されている。先にみた『諸国百物語』の輝政の病の話も、この事件をもとに創作されたものと考えてよいだろう。そして、この事件を契機に再び姫山にまつられるようになった長壁神が、「おさかべ姫」の正体の一つである。



大天守閣東大柱



大天守の暗闇

姫山の地主神



大天守最上層の
長壁神社



城内の長壁神社跡
(とノ二門外)

この長壁神社は、現在姫路市内に3ヶ所ある。大天守最上層、播磨総社境内、旧城下町の立町の3つである。それぞれについて由来を説明してみよう。長壁神は、もともとは刑部（おさかべ）神と表記され、姫路城が建てられる前から姫山にまつられていた。しかし、先に触れたように、天正8～9（1580～81）年の羽柴秀吉による姫路城築城の際に、いったん城下の町はずれに移された後、播磨総社の境内に摂社（せっしゃ）としてまつられるようになっていた。

そして、輝政の病が契機となって、再び姫山の上にまつりなおされることになった。その場所は、城内北東部（城門の名前で言うと、とノ二の門外）であったと見られる。しかしその後、松平氏が姫路藩主となった寛永16（1639）年に再び総社へ戻り、慶安2（1649）年に藩主榊原氏があらためて城内の社殿を再興したとされている。また、この後も総社境内にも長壁神は残り続け、城内と総社境内の2ヶ所の長壁神社が併存していた。

明治になると、城内を陸軍が使用するようになったため、城内の長壁神社は、1879（明治12）年に元塩町（もとしおまち）の総社境内地に移転した。1913（大正2）年には、江戸時代を通して総社境内に残り続けていた長壁神社も、この城内からやってきた長壁神社に合祀（ごうし）され、さらに1927（昭和2）年の国道拡幅にともなって現在の位置に移転したのが、総社境内の長壁神社である。

一方、現在の大天守最上層の社殿は、1879年に城内長壁神社が総社境内地に移転した後に、あらためてまつられるようになったものとされている。



播磨総社



総社内の長壁神社



立町 長壁神社

また、姫路藩主が榊原氏に交代した宝永元（1704）年には、城下町の豎町（たてまち）にあった長源寺（ちょうげんじ）が、城内長壁神社の世話役寺院に指定された。この時から長壁神は長源寺境内にもまつられるようになった。それが現在立町にある長壁神社のはじまりである。

これら3ヶ所の長壁神社にはいずれも、刑部神とともに、富姫（とみひめ）神という女神がまつられている。『播陽万宝知恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』に収録された中世末～近世の書物には、姫山という名前の由来として、富姫の館があったとする説明を載せるものが多い。たとえば輝政による姫路城築城以前の天正4（1576）年の奥書のついた『播磨府中めぐり』では、姫山は富姫の館があったためについた名であり、刑部社、角ノ社（すみのやしろ）、富姫ノ社（とみひめのやしろ）、角岳国主（すみだけくにぬし）の社などが、当時の姫山の鎮守である、と書かれている。

刑部姫と富姫神

刑部神と富姫神の由来については、近世の段階ですでに諸説あったが、刑部神は、奈良時代末期の光仁天皇（こうにんてんのう）と皇后井上内親王（いのうえないしんのう）との間に生まれた他戸親王（おさべしんのう）である、とする説が主流であった。そして、富姫についても、この井上内親王と他戸親王との母子の間に生まれた不義の子供が富姫で、都から播磨にさまよい下って姫山に館を構えた。この富姫をまつるのが富姫神である、とする説が多い。

こうした諸説はあくまでも近世の理解であって、歴史的な事実とは考えにくい。ただし、井上内親王と他戸親王とは実在の人物である。この二人は、宝亀3（772）年に光仁天皇を呪詛（じゅそ）したとして皇后・皇太子の位を追われ、のちに幽閉先の大和国で殺害された母子であった。紀行文「戦争と怨霊」でも紹介しているように、古代から中世にかけては、こうした政争や戦乱に敗れた人は怨霊となつてたたと観念されることが多かった。井上・他戸の母子も、後にたたりがあったとして、神としてまつられることとなった。こうした神への信仰を「御霊信仰（ごりょうしんこう）」と呼ぶ。姫山の刑部神と他戸親王の結びつきも、こうした御霊信仰が伝わった結果と考えられる。

一方、刑部神の本来の由来は、古墳時代～飛鳥時代にかけての中央豪族の私有民である部民（べみん）の一つ、刑部（おさかべ）にあると考えられる。刑部は全国的に広く分布し、播磨にも存在したようだ。こうした刑部の人々がまつる氏神が、本来の刑部神だったと考えられる。そして、他戸親王との名称の類似から、いつしか姫山の刑部神と他戸親王の御霊信仰が結びつくことになったのであろう。

『播磨国風土記』の姫山伝説

さて、姫山の由来については、より古い別の伝説がある。奈良時代初めの『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では、姫山の由来を次のように説明している。

むかし、国造りをした大汝遅命（おおなむちのみこと）が、できの悪い息子を島に置き去りにして船を出してしまった。ところが怒りくるった息子が逆襲し、父親の乗る船をひっくり返してしまった。そのときひっくり返った船や、こぼれ落ちたいろいろな道具がそれぞれ丘になった。（現在の姫路市街地の中にある）十四の小丘はこうしてできたもので、そのうち蚕子（ひめこ＝「かいこ」のこと）が落ちたところが、日女道丘（ひめじおか）、すなわち現在の姫山である。

このサイトのほかの紀行文でも紹介しているように、伝説は時代によってその内容を変えていくものが多い。姫山の由来についても、いつしか上に記した『風土記』の説明から、他戸親王と富姫の説明などに変わっていったのであろう。ただし、いずれにしても、中世のころから刑部神と富姫神がセットで、姫山の神としてまつられていたことは確かである。



姫山の上に建つ姫路城

時代が変われば、そこに住む人も治める人も代わっていく。しかし、いつの世も新しく入ってきた者は、古くからいる人々を尊重しなくてはうまく暮らせない。そのような思いは歴史の中で、地域の古くからの神々を尊重する意識を生み出していった。ここまで説明してきたように、刑部神と富姫神とは、本来は別の神であった。両者を融合させた「おさかべ姫」伝説は、こうした地主神への畏れをも背景として生み出されたものなのだろう。



姫山の上に建つ姫路城

なお、「おさかべ姫」の話の中には、正体はきつねだったとするものもある。これはこのサイトでも別に紹介している「およし狐」の話と「おさかべ姫」が結びついたものであるが、この話については紀行文「狸と狐」であらためて紹介したい。

用語解説

【『諸国百物語』】しょこくひやくものがたり

延宝5（1677）年刊。100話の怪奇物語を収める怪談集。幽霊などの妖怪変化を扱った民話的な怪奇物語が大半を占め、先行する『曽呂利物語（そりりものがたり）』との類似関係が目立つことが指摘されている。本書以後、18世紀中ごろまで、『御伽百物語（おとぎひやくものがたり）』、『太平百物語』、『古今百物語評判』など、「百物語」を題名の中に持つ怪談集が続々と刊行されるようになった。

【『今昔画図続百鬼』】こんじゃくがずぞくひゃっき

安永8（1779）年刊。鳥山石燕（とりやませきえん）画。安永5（1776）年に刊行された『画図百鬼夜行（がずひゃっきやぎょう）』の続編で、「妖怪図鑑」としての性格を持つ。石燕はこれ以後も、『今昔百鬼拾遺』、『百鬼徒然袋（ひゃっきつれづれぶくろ）』を著した。この4つの画集で、200種以上の妖怪が描かれている。石燕は狩野派の絵師で、隠居仕事に画業を行ったと言われ、『画図百鬼夜行』以下4つの妖怪画集は、60代になってからの仕事であった。

【宮本武蔵】みやもとむさし

1584？ 1645。江戸時代初めの武芸者。自らの著書『五輪書（ごりんしょ）』によれば、13歳から29歳までの間に60回余りの勝負をし、すべて勝利したという。大坂の陣（1614 1615）では徳川方として参陣したと考えられ、その後、姫路藩主本多忠刻（ほんだただとき）、明石藩主小笠原忠真（おがさわらただかね）の客分となって、姫路や明石の城下町・寺院建設、作庭などに関与したとされる。

寛永15（1638）年の島原の乱では小笠原氏に従って参陣、その後寛永17（1640）年に熊本藩主細川忠利（ほそかわただとし）に招かれて客分となる。寛永20（1643）年から『五輪書』の執筆を進め、正保2（1645）年熊本で没した。武芸をめぐる数々の伝説のほか、水墨画などの書画作品も残されている。

【『播陽因果物語』】ばんよういんがものがたり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻38収録。松原集山（まつばらしゅうざん）著。『枕草子（まくらのそうし）』、『平家物語』、『太平百物語（たいへいひやくものがたり）』、『因果物語（いんがものがたり）』など、先行するさまざまな書物から、播磨に関係のある話を集めたもの。序には宝暦7（1757）年とあり、このころ成立したと見られる。

【池田輝政】いけだてるまさ

1565 1613。織田信長（おだのぶなが）の家臣である池田恒興（いけだつねおき）の次男。父と兄の元助（もとすけ）が小牧・長久手（こまき・ながくて）の戦い（1584年）で戦死したために家督を継ぐ。関ヶ原の戦い（1600年）の後、三河吉田（みかわよしだ = 現在の愛知県豊橋市）15万石から加増されて、播磨姫路（はりまひめじ）52万石の領主となる。慶長6（1601） 14（1609）年にかけて、羽柴秀吉（はしばひでよし）が築いていた姫路城を大改修し、現在見られる城郭と城下町を建設した。

徳川家康の娘である督姫（とくひめ）を妻としたために江戸幕府から重用され、長男の利隆（としか）のほか、督姫が生んだ子供たちなども順次それぞれに所領を得て、一時は一族で播磨、備前（びぜん = 現在の岡山県南東部）、淡路（あわじ）、因幡（いなば = 現在の鳥取県東部）に合計100万石近くを領有した。慶長18（1613）年死去。

用語解説

【羽柴秀吉】はしばひでよし

1537 - 1598。織田信長に仕えて頭角を現し、天正5（1577）年に信長の命を受けて播磨に進出する。この時点ですでに播磨の多くの勢力は信長に服属していたが、小寺孝高（こでらよしたか、後の黒田如水）の協力などによってあらためて平定を進めた。しかし、天正6（1578）年に三木の別所（べっしょ）氏、摂津有岡城（ありおかじょう=現在の伊丹市）の荒木村重（あらかむらしげ）が相次いで離反したため、三木城などをめぐって戦った。天正8（1580）年に、別所氏のほか、英賀（あが=現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）の一向一揆勢力、宍粟郡（しろうぐん）の宇野（うの）氏などを攻略して播磨を平定した。また同時期に但馬へも兵を進めていて、最終的には播磨と同じ天正8年に、守護家山名氏を降伏させて平定した。天正9（1581）年には因幡国鳥取城や淡路国を攻略するとともに、居城としていた姫路城を改築している。

天正10（1582）年の本能寺の変の後、明智光秀（あけちみつひで）、柴田勝家（しばたかついえ）らを相次いで滅ぼし、小牧・長久手の戦い（1584年）の2年後に徳川家康（とくがわいえやす）を臣従させ、天正13（1585）年に四国を平定する。翌14年には豊臣姓を名乗り関白となり、15年に九州を平定、天正18（1590）年に関東、東北を平定し全国を統一した。文禄元（1592）年からは2度にわたる朝鮮半島への侵略戦争を進めたが、慶長3（1598）年に没した。

【播磨総社】はりまそうしゃ

姫路城の南東にある神社。祭神は射楯大神（いたておおかみ）と兵主大神（ひょうずおおかみ）。10世紀の『延喜式（えんぎしき）』にも見える。社伝によれば、養和元（1181）年に播磨国内の神々174座を境内に合祀し、播磨国惣社（現在では「総社」と表記する）と称されたという。「惣社」とは、一般的には平安時代後期以降に見られるようになる、国府の近くに国内の神々を合祀した神社を指す。この社伝も、具体的年代についてはなお検討が必要であろうが、こうした全国的な流れの中で播磨の総社も成立したことを示すと見てよい。なお、「総社」は、一般的には「そうじゃ」と読む場合が多いが、播磨では「そうしゃ」と濁らずに読む。

【『播陽万宝知恵袋』】ばんようばんぼうちえぶくろ

天川友親（あまかわともちか）が編纂した、播磨国の歴史・地理に関する書籍を集成した書物。宝暦10（1760）年に一旦完成したが、その後も若干の収録書籍の追加が行われている。天川友親は現在の姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）の商家に生まれた。収録された書物は、戦国末・安土桃山時代から、友親の同時代にまでわたる125件に及ぶ。これらのほとんどは、現在原本が失われてしまっており、本書の価値は高い。活字化されたものは、八木哲浩校訂『播陽万宝知恵袋』上・下（臨川書店、1988年）がある。

【『播磨府中めぐり』】はりまふちゅうめぐり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻18収録。芦屋道海（あしやどうかい）著。末尾に天正4（1576）年4月7日とあり、このころの成立と見られる。播磨府中（姫路）周辺の城跡、社寺、名所などを詳細に記し、池田輝政（いけだてるまさ）による現姫路城築城以前の姫路を知るうえで重要な史料である。ただし、後世の補筆も多く見られる。著者の芦屋道海は、英賀（あが=現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）の住人で、平安時代の陰陽師芦屋道満の子孫を称したという。『播陽万宝智恵袋』には、この他に、『近村めぐり一步記』、『播州巡行（考）聞書』も道海の著書として収録されている。また、『播磨鑑（はりまかがみ）』にも道海の和歌が見える。

用語解説

【光仁天皇】こうにんてんのう

709 - 81。天智天皇（てんじてんのう）の皇子志貴皇子（しきのみこ）の子。神護景雲4（770）年、称徳天皇（しょうとくてんのう）の死去にあたって藤原氏ら群臣に推されて皇太子となり、ついで即位。奈良時代を通して天武天皇（てんむてんのう）の子孫が天皇となっていたが、光仁の即位によって天智系統に代わることとなった。天応元（781）年、病を得て皇太子山部親王（桓武天皇、かんむてんのう）に譲位し、同年没した。

【井上内親王】いのうえないしんのう

717 - 75。光仁天皇の皇后。聖武天皇（しょうむてんのう）の皇女。宝亀3（772）年、天皇を呪詛（じゅそ）したとして皇后を廃され、ついで息子の他戸親王（おさべしんのう）も母の罪を受けて皇太子を廃された。翌年、他戸親王とともに大和国宇智郡（やまとのくにうちぐん = 現在の奈良県五條市）に幽閉され、同6年4月、母子同日に没した。政府関係者による毒殺と考えられている。

【大汝遅命】おおなむちのみこと

『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では、播磨の国づくりを進めた伊和大神（いわおおかみ）の別名として登場するが、一般的には、出雲神話（いずもしんわ、出雲は現在の島根県東部）に登場する大国主（おおくにぬし）の別名である。このことは、播磨土着の神である伊和大神が、記紀神話（『古事記』、『日本書紀』の神話）の影響を受けて、大国主と同一化されたことを示すとも考えられている。

なお、大国主は、記紀神話ではスサノオの息子、もしくは子孫とされ、少彦名神（すくなひこなのかみ）と協力して国づくりを進め、やがて天から降ってきた天照大神（あまてらすおおみかみ、「てんしょうだいじん」とも読む）の子孫に国土を譲り、出雲に祀られるようになったとされている。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 播磨の巻	1918(1978復刻)	編著:藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の伝説	1980	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 2	1986	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨国風土記(収録:日本古典文学大系新装版『風土記』)	1993	校注:秋本吉郎	岩波書店
諸国百物語(収録:叢書江戸文庫2『百物語怪談集成』)	1987	校訂:太刀川清	国書刊行会
播州小刑部社記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
姫辺古記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
国術巡行考証(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨府中めぐり(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播陽府辺廿四社巡拝名略記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州古処拾考(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播陽因果物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州諸所古今物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
播州名所巡覧図絵	1974	著者:秦石田、校訂:井口洋	柳原書店
『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』(角川文庫ソフィア)	2005	鳥山石燕	角川書店
池田輝政夫妻への警告と噂(収録:兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県の歴史』3号)	1975	高尾一彦	兵庫県
播磨伝説風土記	1976	編集:読売新聞社姫路支局	姫路駟路の会
姫路市史 14 別編姫路城	1988	姫路市史編集専門委員会	姫路市
播磨国総社 射楯兵主神社史	1996	編集:射楯兵主神社史編纂委員会	射楯兵主神社
播磨 山の地名を歩く	2001	編集:播磨地名研究会	ひめしん文化会、神戸新聞総合出版センター
狐の日本史 古代・中世編	2001	中村禎里	日本エディタースクール出版部
地母神の記憶を受け継ぐ 姫路城天守閣に棲む妖怪、おさかべ姫 (収録:橘川真一編著『はりま伝説散歩』)	2002	埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター
狐の日本史 近世・近代編	2003	中村禎里	日本エディタースクール出版部
恋するオサカベ(収録:ナイトメア叢書3『妖怪は繁殖する』)	2006	横山泰子	青弓社

所在地リスト



立町長壁神社	姫路市立町33
姫路城	姫路市本町
総社 (射楯兵主神社)	姫路市総社本町190

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日